



教職大学院 Newsletter

No. 179

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4

2024.2.17

実践し省察するコミュニティ 実践研究 福井ラウンドテーブル 2024 HYBRID (対面-Online) SPRING SESSIONS 特集号

実践し 省察する コミュニティ

Round Tables:
Spring Sessions 2024
for Reflective Practice
and Organizational Learning
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル

2024 Spring sessions

17(sat) 8:40-17:40
18(sun) 8:20-14:00
福井大学総合研究棟V(教育系1号館) 総合研究棟
online-offline hybrid sessions with Zoom

探究する学びを実現する教師
教師の実践力を培う学校拠点
教師を支える教職大学院の実践研究

学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2024.2.17-18

福井大学連合教職大学院・総合教職開発本部
福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科
後援 福井県教育委員会

online-offline hybrid sessions with Zoom

内容

学び合うコミュニティのつながりと展開を
支える場としてのラウンドテーブル (2)

全体スケジュール (3)

Keynote Session (Session I)

教職大学院改革特別フォーラム (4)

Zone Session (Session II)

Zone A 学校 (5)

Zone B 教師教育 (6)

Zone C コミュニティ (7)

Zone D International (8)

Zone E 探究 (9)

Zone F インクルーシブ (10)

Round Table Cross Sessions (Session III)

実践の長い道行きを語り、
展開を支える営みを聞き取る (11)

実践し省察するコミュニティを結び支える (12)

ラウンドテーブルの歩み (14)

福井大学連合教職大学院が実践する教育改革
グローバルコミュニティへの誘い (16)

アーカイブ (18)

2001年3月、21世紀とともに始まった実践研究福井ラウンドテーブルは、今回2024年2月の開催をもって46回を迎えます。今回のラウンドテーブルも、多様な実践と省察との出会いに満ちています。今回は、ハイブリッド(対面-Online)にてSPRING SESSIONSを開催いたします。

2月17日(土)には、教職大学院改革特別フォーラム、6つのテーマに即したZONE SESSIONS、2月18日(日)には小グループ(5-6名程度)で実践を丁寧に語り聴き合うROUND TABLE CROSS SESSIONSを行います。

この2日間が、お互いの成長を支え合い、大人も子どもも育ち合うコミュニティになることを、スタッフ一同大いに期待しています。

学び合うコミュニティのつながりと展開を支える場としてのラウンドテーブル

福井大学連合教職大学院教授 岸野 麻衣

「ラウンドテーブル」はいろいろなところで取り入れられ、行われるようになっている。取り入れられているのは、小グループを編成し、一つのテーブルを囲って語り合うという、表面の構造になっていないだろうか。これではいわゆる「グループ協議」と変わらない。それとは異なり、「実践研究福井ラウンドテーブル」は、学び合うコミュニティのつながりと展開を支える場としての意味を持つ。

「学び合うコミュニティ」の種類はさまざま。学校教育、教師教育、社会教育、特別支援教育、さまざまな領域・分野の実践者と研究者が、校種も地域も立場も越えて集う。さらには学びを推進する当事者である子どもたちも世代を越えて集う。それぞれが、それぞれのコミュニティで実践を重ね、省察しようとするメンバーが集っているとみえる。

1日目、ポスターセッションでは、その多様な実践に出会うことができる。市場を歩くように、広場に繰り出された実践に出会い、対話を交わすことは、実践の広がりや奥行に触れることができる。そこで大事にしたいのは「対話」だ。プレゼンテーションとQ&Aではない。実践にどう取り組み、どういう展開を辿ってきているのか、状況の見取りと展開をお互いに語り合い、共有することで得られるものがあるはずだ。

続く各領域（Zone）でのシンポジウムもまた、話題提供として語られる実践を丁寧に聴き、それを通して自分の実践を捉え返す場である。良い話を聞いて役に立つことを取り入れるというような、知識を得るための単純な場ではない。

その後のフォーラムでは、他者の実践をどう聴いたのか、自分の実践についてどんなことが照らし返されたのか、考えたことを言語化することになる。ここで何か一つの結論や答えを出す必要はない。むしろもっとわからなくなっていくこともあるだろう。より核心的な問いに向かっていくこともあるだろう。いずれにせよ、さらなる探究へ向かっていく場なのである。

2日目は、領域・分野を解いたグループが編成される。じっくりと時間をかけてお互いの取組のプロセスを辿りあう。それにより、自分の領域では当たり前のことがそうでないことに気づくなど、さまざまな問い直しが行われていく。領域・分野を越えて共通の問いが生まれ、それが実践の吟味につながることもあるだろう。そうした対話を経ると、それまで分かったような気のしていた自分の取組の意味を、改めて掘み直すことにつながるに違いない。

2日間とも、実践を語ることが基軸となるが、その基盤となるのが「記録」である。書き言葉にする過程では、自分の経験にふさわしい言葉を探し吟味することで省察が深まる。そして記録を共有することで、聴き手の側もより詳細な背景や試行錯誤のプロセスを理解することが可能となる。実践の歩みを書き残してきた記録があることで、協働での深い省察につながるのである。こうした専門職として省察的に学び合っていくモードは、実践の展開を持続・発展させていく上で欠かせないものでもある。

専門職として、長いまなざしの下で、文脈を探り、状況を掴み、実験を重ね、省察する。そのプロセスでは、時に驚き、時にワクワクしながら、自分なりの挑戦に臨んでいるに違いない。ラウンドテーブルでは、こうした挑戦があふれ、あちこちに伝播していく。属するコミュニティは違えど、協働で省察し、共に探究している仲間である。世代のサイクルを重ねてきたことで、専門職として省察的に学び合っていく文化が醸成されてきている。ラウンドテーブルは、このように、学び合うコミュニティのつながりと展開の支えとして重要な意味を持つのである。

全体スケジュール

実践研究 福井ラウンドテーブル2024 Spring sessions

The 24th anniversary year of Round Table Cross Session in University of Fukui since 2001

2/17 (sat) 8:40-17:40 (zoom 接続開始 8:10)

Session I Keynote Session

教職大学院改革特別フォーラム 8:40-11:00

「新たな教師の学び」を支える協働のために
学び合うコミュニティを多重に編成する研修サイクル

Poster Session I ポスターセッション 11:20-12:20-大学生・社会人- (Zoom 接続開始 11:00)

Poster Session II ポスターセッション 13:10-14:10 -児童・生徒- (Zoom 接続開始 12:50)

Session II Zone Sessions

学校・教育・地域を考える6つのアプローチ 14:30-17:40

- A 学校:子ども主体の学びを実践するコミュニティ
- B 教師教育:学び合う学校づくりのための組織・コミュニティの醸成
- C コミュニティ:持続可能なコミュニティをコーディネートする
一世代や立場を超えたつながりの広がり、どのようにして実現してきたのかー
- D International:International Initiatives on Collaborative Learning
- E 探究:学(まな)びと教(おし)えのあたらしいすがたをみんなで考える
- F インクルーシブ:「個」の視点から教育を再考するー子どもと教師の接面を探るー

2/18 (sun) 8:20-14:00

Session III Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:20-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告Ⅰ 9:00-10:40 ④報告Ⅱ 10:40-11:40 ⑤報告Ⅲ 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。
地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で
一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少し
ずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっ
くり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていききたいと思います。心に残っている場面。
言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し
合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていききたいと思います。
実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培わ
れていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。
そのため 8:20-14:00 の全日程を 6 人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。
原則として 8:20-14:00 の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくお願いいたします。

2 / 17 (sat) 8:40-11:00 (オンライン開催) zoom 使用

Keynote Session 教職大学院改革特別フォーラム

「新たな教師の学び」を支える協働のために(5)

学び合うコミュニティを多重に編成する研修サイクル 園と市町と県・大学がつながる福井の幼児教育研修を事例に

2022年12月19日の中央教育審議会から出された『「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）』では、「新たな教師の学びの姿」として、子供たちの学び（授業観・学習観）とともに教師自身の学び（研修観）も転換し、教師にも「主体的・対話的で深い学び」が求められることが改めて確認された。この研修観の転換に向けては、文科省で予算措置（令和4年度教員研修高度化推進支援事業）もなされるようになり、具体的な条件整備も進んでいる。

本フォーラムではこれまで、理論と実践の往還・融合、教員免許更新制廃止後の研修改革、教員養成フラッグシップ大学構想、学校における学び合うコミュニティの展開、協働探究型研修の創造・展開といった点から教師教育改革の展望を共有してきた中、今回は、施設類型（幼稚園、保育所、認定こども園）をまたいで保育者が学び合うコミュニティを多重に組織している福井県の幼児教育研修システムを事例に、「新たな教師の学び」を支える協働のあり方に迫ってみたい。

趣旨説明

報告1： 4つの園のコミュニティを結び、保育者の学び合いを支える

高浜町立認定こども園・保育所 実践研究グループ ぴっか

報告2： 市町のコミュニティを培う県の研修のデザインとサイクル

福井県教育庁 義務教育課長 三崎 光昭

報告3： 分散型コミュニティの多重構造を支える

福井大学大学院連合教職開発研究科 教授 岸野 麻衣

コメント

独立行政法人 教職員支援機構 審議役／次世代型教職員研修開発センター長 佐野 壽則

国立教育政策研究所 初等中等教育研究部 総括研究官 白水 始

省察と展望

福井大学大学院連合教職開発研究科 教授 柳沢 昌一

〈コーディネーター〉 福井大学大学院連合教職開発研究科 准教授 遠藤 貴広

2/17 (sat) 14:30-17:40 (オンラインの場合の接続開始 14:00)

Zone Session 学校・教育・地域を考える6つのアプローチ

Zone A 学校

(対面開催)

子ども主体の学びを実践するコミュニティ

Zone A 学校のテーマは「子ども主体の学びを実践するコミュニティ」です。学校は今や、教師だけでなく、地域や保護者、そして子どもたち自身が作りあげていく、「チーム学校」としてのコミュニティが求められています。子どもを中心におき、子どもを取り巻くあらゆる力や、子どもたち自身の学びの力を結集して学校をつくっていく。そうしたコミュニティの在り方を考える中で、教師の学びだけでなく、子どもたちを取り巻くあらゆる学びの可能性について探究していきます。

今回のシンポジウムでは、公教育の第一歩である幼児教育における子どもたちの姿、さらに成長した中学校での生徒たちの姿を、登壇者の方にあるがままに語っていただき、子どもたち自身の学びの力、子どもたちを支える周りの大人たちの力によって、どのようなコミュニティが生み出されていくのか、またそこで子どもたち、大人は何を学ぶのかを考え合いたいと思います。

Orientation 14:30-14:40 オリエンテーション

会場 教育系1号館2階大1講義室

Session I 14:40-16:00

Symposiums

「子ども主体の学びを実践するコミュニティ」

<シンポジウム>

<シンポジスト>

14:40-15:00

越前市立認定こども園服間

玉村美幸園長

15:00-15:20

信州大学教育学部附属松本中学校

湯本哲教諭

探究的な学習プロセスの中で、相互作用を通して子どもたちが学び合っていくストーリー、それを支える先生たちの組織・コミュニティについて話題提供を踏まえて考えていきます。

全体討議 15:20-16:00

<休憩> 16:00-16:20

Session II 16:20-17:40

Breakout Room 会場は当日ご案内します

Cross-session

現状共有と明日への展望

Session I の議論に基づき、参加者それぞれのコミュニティでの長い実践を共有し、新たな出会いと協働を編み込んでいきます。校種等をクロスした小グループ形式での対話を編み込み、実践をデザインし、展望を生み出します。

Zone B 教師教育

(対面・オンラインのハイブリッド開催)

学び合う学校づくりのための組織・コミュニティの醸成

今日の学校教育においては、変化の激しい時代の中で持続可能な社会の創り手となる子どもたちの資質・能力を育むため、主体的・対話的で深い学びの実現など、教育の質的転換・向上が大きな課題となっています。教師は主体的・継続的に学び、協働して力量を高めていながら、互恵的に学び合い高め合う組織づくりにも一層取り組んでいく必要があるなど、学校は大きな変革の中にあります。また、学校、地域、大学、自治体をつないだ広いコミュニティの中で子どもと教師が共に学び合う学校組織の新しい在り方が求められています。

Zone B「教師教育」では、教師の主体的・対話的で深い学びを目指した校内/園内を含む多様な研修や協働研究の在り方について、展望を拓いていきます。今回は、先進的に改革に取り組んでいる学校などの多様な実践を共有し、校種を超えて学び合う学校づくりのための組織・コミュニティの醸成について共に考えていきたいと思います。多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

なお、今回は対面・オンラインのハイブリッドで実施します。

Session I

14:30-14:40	Zone B オープニング [対面/オンラインのハイブリッド開催]	
	<パネルディスカッション>	
14:40-15:00	実践報告 1 (山形県立山形東高等学校)	須貝英彦 校長)
15:00-15:20	実践報告 2 (鳴門市里浦小学校)	武知将人 教頭)
	休憩	
15:30-15:50	実践報告 3 (岐阜市立草潤中学校)	中今純一 教諭)
15:50-16:40	協議	

<進行・コーディネーター>

福井大学附属義務教育学校	校長	
福井大学連合教職大学院	教授	牧田 秀昭

自律的に学び続ける教師集団の校内研修の在り方について展望を拓いていきます。

Session II

16:50-17:40 フォーラム

実践報告を踏まえ、参加者それぞれが今後の取組にどのように生かし、つなげることができるか、小グループで協議します。

Zone C コミュニティ

(オンライン開催)

持続可能なコミュニティをコーディネートする

～世代や立場を超えたつながりの広がり、どのように実現してきたのか～

Zone C ではこれまで、「持続可能なコミュニティをコーディネートする」というテーマのもと、地域の学習活動や地域課題の解決をめざす様々な活動の事例をわかちあい、対話を通じた探究を積み重ねてきました。その中で発見されてきたのは、「若者や外部の視点を取り入れて、地域を活性化させていこうとする動き」、あるいは、「公民館主事の方、地域の活性化に取り組んでいる方、地域と協働しながら教育活動を展開する教育関係者の方などが幅広く集い、共に話しあう姿」でした。

今回は、中学生へのキャリア教育の出前授業を通して、地域の担い手づくりをめざしている団体の活動や、地域の伝統と文化の継承と活性化についての事例報告を受け、地域への誇りや愛着を支え育むものが何なのかを探りました。

今回、Zone C では、小学校での探究学習が地域社会に継続的に力（元気）をもたらしてきた事例を紹介していただきます。事例の中では、小学生が地域課題を解決する総合的な学習の試みを発端として、その学びが中学校、高校へとつながっていく様子が語られます。さらには、子どもたちの思いを支援し共に歩もうとするつながりの輪が地域や行政へと広がり、地域社会にとっての大きな力となっていきます。このような「世代や立場を超えたつながりの広がり」は、どのように実現してきたのか、その継続的で発展的な過程にご注目いただければと思います。

事例に耳を傾けた後は、感じたことや、想起したことなどをわかちあう対話の時間です。私たちが、コミュニティの中でいかに学びあい成長するのか、あるいは、地域の一員としての自己有用感や誇りや愛着はいかに育まれるのか、その結果として持続可能なコミュニティはどのように実現していくのかなど、対話を楽しみつつ探っていきましょう。

14:30～14:40 趣旨説明 永谷彰啓

14:40～15:10 実践報告「ふるさと美浜元気プロジェクト」

平城 慶彦氏（美浜町立美浜中央小学校教諭）

コーディネーター：永谷彰啓

15:10～15:40 中学校・高等学校・行政・生徒の話 司会との話し合いの中で

行壽 浩司氏（美浜町立美浜中学校教諭）

吉岡 弘和氏（福井県立美方高等学校教諭）

山本 知也氏（美浜町まちづくり推進課）

生徒代表

全体ファシリテーター：富永良史

15:45～16:00 休憩（チャットタイム）

16:00～16:50 小グループでの話し合い

16:50～17:00 休憩（チャットタイム）

17:00～17:40 全体共有と全体セッション～ふり振り返りと展望～

Zone D International

(Online) <同時通訳あり>

International Initiatives on Collaborative Learning: Teacher Education Reform through Lesson Study

The Fukui Roundtable is held semi-annually in February and June. The Roundtable consists of five zones (A, B, C, D, E). **Zone D International** provides a platform for collaborative learning on practices and future prospects for teacher education reform inside and outside Japan.

The University of Fukui has been accepting a large number of foreign students who are engaged in teacher education through collaborative learning and has been maintaining its ties with the past foreign students by inviting them to the Roundtable to share their previous and current practices with practitioners from different countries. Moreover, since 2021, as part of its global development, the University of Fukui has been focusing on the Nalikule College of Education and its demonstration school in the Republic of Malawi and following the process of their reflective lesson study.

This Zone will consist of two sessions; Symposium and “Roundtable.” In the symposium, the symposiasts will discuss the proposed approaches, results, and challenges in their contexts. In the “Roundtable,” educators from various countries will share their practice and learn from each other in small group discussions. We hope that these examples will encourage you to reflect upon your own practices. These sessions will also be translated into Japanese.

Zone D では、実践における協働的な学びのプラットフォームを提供し、国内外の教員養成の展望を拓くことを目的とし、世界各国の教育関係者と実践や学びを共有し、捉え直しを行っています。

福井大学教職大学院では、世界各国からの留学生を受け入れています。福井ラウンドテーブルでは、探究型学習を通じた教師教育を受けた留学生が帰国後の授業実践の報告も行っています。加えて、2021 年からは、福井大学が行っているマラウイ共和国のナリクレ教員養成大学及び附属高校と協働・連携し、子ども中心の授業や協働探究学習について語り合ってきました。今回も引き続き、世界各国の様々な実践を聴き合う中でより良い子どもたちの学びについて探ります。この Zone においてはシンポジウムでの事例紹介とラウンドテーブルでの議論を通して、参加者自身の実践と省察が深まることが期待されます。

なお、本セッションは英語での議論となりますが、[日-英の通訳を行います](#)ので、ご希望の方は、申し込みの際に通訳希望としていただき、当日は通訳用の Zoom に接続するためのデバイスを[別途](#)ご用意ください。

<i>Session I</i>	15:00-16:00	<i>Symposium</i>
<Symposiast>		1. Sampling the 2023 WALs Conference and Post-Conference Outcomes: A Presentation at the Fukui Roundtable Chanya Bertha, Science teacher of Myunguchi CDSS
		2. Professional Development in the Philippines, Michael Rosero, Executive Assistant of the Undersecretary for Curriculum and Teaching, Department of Education, Central Office
<Moderator>		Mr. William Tjipto, University of Fukui
<Commentator>		Mr. Masato KOSAKA, University of Fukui
<i>SessionII</i>	16:20-18:00	<i>Roundtable</i> Sharing and learning from each other's practices in small groups. The following guest speakers are placed in each group: Ms. Desta (Ethiopia), Mr. Vwalika & Ms. Chanya (Malawi), Dr. Mokotjo (South Africa), Ms. Kalule & Mr. Mudde (Uganda), Mr. Tjomita (Namibia), Mr. Rosero (Philippine) and Ms. Sameh (Egypt)
<i>Closing</i>	18:00-18:10	Mr. Kazuo KOBAYASHI

Zone E 探究

(オンライン開催)

学びと教 へのあたらしいすがたカタチをみんなで考える

Zone E 探究では、「学びと教 へのあたらしいすがたカタチ（ニューノーマル）」をテーマにして、子どもたち・若者たちと大人たちが世代を超えて探究します。

子どもたち・若者たちの遊び・学び・探究が学校から地域・世界へとひろがり、学校・教室内外の遊び・学び・探究の行き来がダイナミックにひろがる中で、子どもたち・若者たちと大人たちの学びと教 へのあたらしいパートナーシップからそれぞれの思いや大事にしていることを共有する価値に気づいてきました。そこで今回の Zone E 探究では、いくつかのテーマについてそれぞれの思いや大事にしていることを共有することで、どのようなあたらしい価値が生まれるのかを試してみたいと思います。

1. 日程 2024年2月17日（土）

- 11:00 - 11:15 受付 1
- 11:20 - 12:20 ポスターセッション1※
- 12:25 - 13:00 受付 2
- 13:10 - 14:10 ポスターセッション2※
- 14:30 - 17:40 価値共有 から 価値創造 へのチャレンジワークショップ

※ポスターセッションで、遊び・学び・探究・プロジェクトを発表して下さる子どもたち・若者たち・大人たちを募集しています。ご発表いただいた方には福井大学大学院発行 発表認定書 をお贈りいたします。ポスターセッションの2つの時間の前後に、受付をおねがいします。

2. 会場 対面：福井大学文京キャンパス

- 受付 教育系 1号館 1階 ロビー
- ポスターセッション 教育系 1号館 1階・2教育系 1号館 1階の教室（予定）
- ワークショップ 総合研究棟 I 13階 大会議室

Zone F インクルーシブ教育

(対面開催)

「個」の視点から教育を再考する

ー子どもと教師の接面を探るー

共生社会の実現、多文化共生、ダイバーシティの推進など、多様性が尊重される社会の実現は、我が国における一つの大きな課題となっています。多様性の尊重はマイノリティや社会的弱者といった一部の人々に関する問題としてクローズアップされがちですが、そもそも、私たちはみなそれぞれがユニークな存在であり、多様性を彩る一員です。つまり、多様性が尊重される社会とは、全ての人があるがままに生きることが大切にされる社会に他なりません。そうした意味でのインクルーシブな社会の実現には、全ての子どもがあるがままの存在として生き、育つことのできる教育の取り組みが不可欠です。この困難な課題に立ち向かうため、実践研究福井ラウンドテーブル 2021 Spring Sessions において「ZoneF インクルーシブ教育」は立ち上がりました。そして、実践研究福井ラウンドテーブル 2021 Summer Sessions 以降は、『ZoneA 学校』とのコラボレーションによって、多様な背景や困り感を持つ子どもも含めたすべての子どもが、あるがままの存在として生き、育つことのできる学校教育の在り方を探究してきました。その中で、一人ひとりの子どもに寄り添うこと、子どもの視点から学校の当たり前を問い直すことの重要性を再確認してきました。

多くの子ども達が共に学ぶ学校の中で、一人ひとりの子どもの思いを深く共有するのは容易なことではありません。しかし、一人ひとりの子どもに寄り添うためには、そして子どもの視点から学校や社会の当たり前を問い直すためには、一人ひとりの子どもの世界を知ろうとするまなざしを持つことが不可欠です。そこで今回の実践研究福井ラウンドテーブル 2024 Spring Sessions では、個別具体的な子どもの姿の共有を通じて、子どもの世界をより深く知ろうとする営みとその意義について、参加者のみなさまと共に探究していきたいと思っています。

14:30-14:40	オリエンテーション	
14:40-15:05	話題提供 I	福井県立嶺北特別支援学校 教諭 桑島康郎
15:05-15:30	話題提供 II	福井大学教育学部附属幼稚園 教諭 上田晴之
15:30-15:45	指定討論	福井大学 南雲敏秀
15:45-16:00	全体討議	
16:00-16:20	<休憩>	
16:20-17:40	クロスセッション	前半の議論に基づき、校種等をクロスした小グループ形式で参加者の思いや実践を共有します。

会場：コラボレーションホール I

2/18 (sun) 8:20-14:00 (zoom 接続開始 7:50)

Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

【対面】		【オンライン】		【はじめに】 ラウンドテーブルの意味、めざしていること、進め方について確認します。それぞれがいま取り組んでいること、ラウンドテーブルに期待していることを伝え合います。 【報告】 グループによっては、報告者が二人の場合があります。その場合には、この時間帯に、報告者以外のメンバーからも、それぞれの職場や地域・学校での取り組みを紹介してください。 報告Ⅲのあと、もし時間が許すようであれば、今日の感想をお互いに語ってグループごとに会を閉じます。部屋ごとのまとめ等は行いません。
		接続	7:50-8:20	
①はじめに	8:20-8:40	①はじめに	8:20-8:40	
②自己紹介	8:40-9:00	②自己紹介	8:40-9:00	
③報告Ⅰ	9:00-10:40	③報告Ⅰ	9:00-10:40	
④報告Ⅱ	10:40-11:40	④報告Ⅱ	10:40-11:40	
ランチ・ブレイク				
⑤報告Ⅲ	12:20-14:00	⑤報告Ⅲ	12:20-14:00	

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聴き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていききたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていききたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聴き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

実践の展開、そこで考えてきたことをじっくり語っていただき、その展開をたどります。話の間にも小さな確認の質問なども挟んで、やりとりしながら進めることができたらと思います。

ラウンドテーブル

実践し省察するコミュニティを結び支える



2009.3.26

地域も職種も異なる実践者・実践研究者が集い、小グループに分かれてテーブルを囲み、5 時間近く互いの実践を跡づける報告に耳を傾ける。語られる実践の展開を追走しながら、時々の実践者の判断や配慮、実践を支える条件に問いを進める。聴き手の問いに応え、語り手は実践の状況とそこでの思考を改めて思い起こし、それを表す言葉を模索しながら語り進めていく。聴き手もその展開に学びながら、関連する自らの実践とそこでの経験・思考を語り始める。それぞれの経験が照らし合うことによって共通する構造とそれぞれの特色が浮かびあがる。

少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直すこの研究会（実践研究福井ラウンドテーブル、以下ラウンドテーブルと略す）の構成とその意味について、この会に最初から関わってきたものの一人として改めて考えてみたい。

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

一つの授業、一つのプロジェクトも、それが生み出される背景と、それが生きて働く作用の行方まで視界に入れようとするならば、はるかに長い前後の展開を跡づけることが必要となってくる。とりわけ学習者の成長のゆるやかなプロセスを焦点とする教育実践においては、そうした長い展開から目を逸らす訳には行かない。

しかし、個々の授業や実践の検討は数多く重ねられ、また他方でより長いライフヒストリーの跡づけもまた重ねられてきてはいるが、その間にある実践の持続的な展開、実践と実践の間にある調整と成長の長いプロセスへの問いは課題のままに残されてきた。たしかに、そうならざるを得ない理由がいくつも存在している。実践をとともに担っているもの同士では、つねにその状況の中にいるために、問題や課題については話し合ったとしても、実践の展開と状況を子細に語る必要性が存在していない。逆にその実践の外にしているものは、その実践から学ぼうとする場合であっても、自分の実践にすぐに活かそうような具体的な手がかりを求めがちである。そして「外から」実践に迫ろうとする「研究」は、実践の持続に見合うだけの方法も枠組みも組織も準備していない。長い実践の脈絡、そこにある成長のプロセスとそれを支える編成を探るためには、これまでにない実践交流の場・実践の内と外を結ぶ新しい協働の省察の場を生み出していく必要がある。実践の歩みを振り返り、その展開を跡づけ、一人ひとりの成長、自身の実践者としての歩みを問い直そうとする語り手と、その長い展開からより深く学び取ろうとする聴き手が出会う場が必要となる。ラウンドテーブルは、実践に関わる一人ひとりがそうした語り手となり、聴き手となる場を拓こうとする取り組みとして始まる。

実践と省察のサイクルとその交流の場

長い実践の展開を省察し検討することは、日々の仕事に追われるお互いにとっては容易に実現できることではない。実践の場において、実践の展開を語り合い省察するコミュニケーションを持続的に進めていく、専門職として学び合うコミュニティ（Professional Learning Communities）の実現が中心的な課題となる。そうした実践の場での省察を支えるために、福井大学教職大学院では学校拠点での実践カンファレンスを中心に据えている。そしてそうした学校での取り組みを踏まえ、月一回の合同のカンファレンス、実践を語る会を重ね、また半年ごとに集中的に実践の展開を記録化して検討する時間を作っている。月を追って、そして半年、1 年、2 年とそれぞれの取り組みの足取りを確かめていくなかで、それぞれの実践者の、そしてそれぞれの職場の固有のリズムで、ゆるやかに、ときに劇的に実践が展開していくことを実感し合うことになる。時々の実践の記録やカンファレンスでの語らいを、1 年、そして 2 年と積み重ね、その記録を、長期にわたる実践の展開過程として改めてその道行き（trajectory）・脈絡を検討し直して行くなかで、厚みのある実践の現実の展開がようやく見えてくる。あれができないこれが足りないとその時々課題を追っている目には見えない、同じところを回っているようにしか見えない実践サイクルの中にある小さな傾斜が、長い時間の展望の中でとらえ直した時に、ゆるやかな展開として像を結んでくる。自身の見方や考え方の深まり、実践の基盤にある共同関係の展開も、そうした長期にわたる展開の中にはじめて浮かびあがってくる。

しかし、長期にわたる実践省察の意味が、その渦中では実感し難いという現実はある。そうし

た暗中模索の中での実践と省察を支えるためにも、実践をともに歩み語り合う仲間とともに、長い実践の展開の価値を、より広い見地からより鮮明に確かめ直す場が、どうしても必要になってくる。ラウンドテーブルは、実践展開の価値をより広い視点から確かめ直す場として、実践の場での省察、そして大学院での長期的な実践研究を支える重要な支柱となっている。実践と研究の表明の場のゆたかさ、あるいは貧困さは、それが実践の真価を問う場の一つとして働くがゆえに、日々の実践と研究の深まりを支え、逆に拘束することにもなる。交流・表明の場のあり方、その構成が問われることになる。

小グループでの共同探求と開かれた交流を結ぶ

地域を越えた実践交流はこれまでも様々な組織によって取り組まれているが、交流の広がり確保と実践の探究の深まりとは、相反する要求であることもまた確かである。ラウンドテーブルは交流と探究を両立する形を模索する中で生まれてきた。いくつかの特徴的なセッションの構成がここでは取られている。

- ① 実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ② そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。（1 報告 60-100 分）
- ③ 実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。（6 名程度）
- ④ グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。（学校教育・社会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか）
- ⑤ 小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前の前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

パブリックなコミュニケーションという課題 持続を支える記録と機構

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてのみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないか。語り合う 34 の小さな渦、そこでの語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして 20 名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの 9 年の展開を振り返りながら、そう考えは始めている。

（柳澤 昌一 『教職大学院ニュースレター』 No.11 2009.3.31）

ラウンドテーブルの4重の意味

4 Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice

I 長い実践の展開をともに跡づけ、省察する。

Co-reflection in and on longitudinal process of practice

II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。

Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice

I, II → 省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル

III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。

Cultivating Communities of Public and Reflective Learning

IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ

Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning Communities for Reflective Practitioners

実践研究福井ラウンドテーブルの歩み 2001.3-2024.1

2001.3.17-18	春のシンポジウム ラウンドテーブル 教師の実践的力量形成をめざして 木岡一明・寺岡英男(この回は教師教育をめぐる 20 人程度の研究会であり、実践を聴き合う会ではなかった)	
2001.11.10-11	実践研究: 福井ラウンドテーブル 省察的实践を支える協働(第 1 回) For Reflective Practice、Professional Development、and Organizational Learning. 第 1 回目の実践研究福井ラウンドテーブルが開催される。(参加者 20 数名)京都ユースホステル協会 福井市公民館主事 つむぎの会 ゆきんこ共同保育園 福井大学附属小学校 福井大学教育地域科学部児童館プロジェクト・探求ネットワーク	
2002.3.16-17	実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第 2 回) 高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志 フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル 同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル ～現在に至る	
2002.7.13-14	実践研究: 福井ラウンドテーブル(省察的实践を生み出す 学び合う組織を編む)(第 3 回)	
2003.3.15-16	実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第 4 回) シンポジウム 教師教育における専門職大学院の可能性を探る 辻野昭・葉養正明	
2003.7.12-13	実践し省察するコミュニティ 実践研究: 福井ラウンドテーブル(第 5 回)	
2004.3.13-14	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル(第 6 回) 秋田喜代美ほか	
2004.7.3-4	実践し省察するコミュニティ: 実践研究福井ラウンドテーブル 2004 (第 7 回)	
	2004.8	教育のアクションリサーチ研究会が始まる(於熱海～2009)
	2005.1	実践研究東京ラウンドテーブル始まる(於早稲田大学)～現在に至る
2005.3.5-6	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2005(第 8 回 参加者 100 名超) 国際シンポジウム Ann Liebermann 横須賀薫 佐藤学 於国際交流会館	
2005.7.9-10	実践研究福井ラウンドテーブル 2005 (第 9 回)	
2006.3.4-5	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2006 フェニックス・プラザ (第 10 回) 田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭	
2006.7.1-2	実践研究福井ラウンドテーブル 2006 (第 11 回)三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫 兼日本社会教育学会東海北陸研究集会	
2007.3.3-4	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2007(第 12 回)渡邊満・無藤隆・松木健一・新田正樹	
	2007.4	福井大学教職大学院の準備期間が始まる
2007.6.30-7.1	実践研究福井ラウンドテーブル 2007 (第 13 回)藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男	
2008.3.1-2	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2008(第 14 回)横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jae-Hoon Yu	
2008.6.28-29	実践研究福井ラウンドテーブル 2008(第 15 回)人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆	
2009.2.28-3.1	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2009 (第 16 回)稲垣忠彦	
2009.6.27-28	実践研究福井ラウンドテーブル 2009(第 17 回)5 つの領域: 専門職として学び合うコミュニティ (分野ごとのセッション始まる)	
2010.2.27-28	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2010 (第 18 回参加者 300 名前後)鈴木寛 Catherine Lewis	
2010.6.26-27	実践研究福井ラウンドテーブル 2010(第 19 回): 学校・コミュニティ・特別支援・医療看護	
2011.2.26-27	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2011 (第 20 回 参加者 300 名を超える)門脇厚司・森透	
2011.6.25-26	実践研究福井ラウンドテーブル 2011(第 21 回)松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二	
2012.3.3-4	実践研究福井ラウンドテーブル 2012 spring sessions (第 22 回)(名称を変更する)	
2012.6.23-24	実践研究福井ラウンドテーブル 2012 summer sessions(第 23 回) 参加者 450 名を越える 兼日本社会教育学会東海北陸研究集会	

2013.3.2-3	実践研究福井ラウンドテーブル 2013 spring sessions(第 24 回)教師教育改革コラボレーションとの共催
2013.6.29-30	実践研究福井ラウンドテーブル 2013 summer sessions(第 25 回)
	11.30-12.1 実践研究東京ラウンドテーブル 2013winter sessions(明治大学) 2.8 宇都宮大学学校活性化フォーラム(宇都宮大学)1.25 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学)
2014.3.1-2	実践研究福井ラウンドテーブル 2014 spring sessions (第 26 回)参加者 550 名を超える
2014.6.21-22	実践研究福井ラウンドテーブル 2014 summer sessions(第 27 回) 11.8-9 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学) 11.22 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、12.6-7 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学) 2.14 宇都宮大学学校活性化フォーラム、3.7 教育実践福島ラウンドテーブル
2015.2.27-3.1	実践研究福井ラウンドテーブル 2015 spring sessions(第 28 回)参加者 700 名を超える
2015.6.26-28	実践研究福井ラウンドテーブル 2015 summer sessions(第 29 回) 11.21 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム、11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学) 11.28-29 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、12.6 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学) 12.19 教育実践福島ラウンドテーブル、2.13 宇都宮大学学校活性化フォーラム、 2.19-20 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
2016.2.26-28	実践研究福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions(第 30 回)参加者 800 名を超える 生徒ポスターセッションを開催
2016.6.24-26	実践研究福井ラウンドテーブル 2016 summer sessions(第 31 回)参加者総数 547 名 7.8 記念講演&シンポジウム(和歌山大学教職大学院ラウンドテーブル) 11.12 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム、11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学) 11.5-6 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、12.10-11 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学) 2.10-11 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015 2.11-12 宇都宮大学学校活性化フォーラム
2017.2.17-19	実践研究福井ラウンドテーブル 2017 spring sessions(第 32 回)参加者 800 名を超える 特別企画「中等教育特別フォーラム」「保幼小教育フォーラム」を開催。省察実践学会の発足
2017.6.23-25	実践研究福井ラウンドテーブル 2017 summer sessions(第 33 回)参加者総数 566 名 10.14 信州ラウンドテーブル(信州大学教育学部附属学校園)、10.15-21 マラウイラウンドテーブル 11.11 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、11.11-12 教育実践研究フォーラム in 長崎大学 12.9-10 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)
2018.2.22-24	実践研究福井ラウンドテーブル 2018 spring sessions(第 34 回)参加者総数 627 名
2018.6.22-24	実践研究福井ラウンドテーブル 2018 summer sessions(第 35 回)参加者総数 476 名 10.20 信州ラウンドテーブル(信州大学教育学部附属学校園)、10.23 マラウイラウンドテーブル 11.17-18 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.22-23 教育実践研究フォーラム in 奈良 12.15 実践研究ラウンドテーブル in 静岡大学 12.22-23 実践研究東京ラウンドテーブル(東京学芸大学) 2.9-10 宇都宮大学教育実践フォーラム
2019.2.15-17	実践研究福井ラウンドテーブル 2019 spring sessions(第 36 回)参加者総数 930 名
2019.6.21-23	実践研究福井ラウンドテーブル 2019 summer sessions(第 37 回)参加者総数 426 名 9.28-29 札幌ラウンドテーブル、10.23 マラウイラウンドテーブル、 11.16-17 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.9 教育実践研究フォーラム in 奈良、 12.15 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学) 2.8-9 宇都宮大学教育実践フォーラム
2020.2.15-16	実践研究福井ラウンドテーブル 2020 spring sessions(第 38 回)参加者総数 800 名程度 3.3-4 ウガンダラウンドテーブル
2020.6.20-21	実践研究福井ラウンドテーブル 2020 summer sessions(第 39 回)参加者総数 500 名程度 11.21 東京サテライト・ラウンドテーブル 11.21 関西ラウンドテーブル
2021.2.20-21	実践研究福井ラウンドテーブル 2021 spring sessions(第 40 回)参加者総数 550 名程度

2021.6.20-21	実践研究福井ラウンドテーブル 2021 summer sessions(第 41 回)参加者総数 560 名程度 11.13 東京サテライト・ラウンドテーブル 11.21 協働探究ラウンドテーブル奈良 2021
2022.2.20-21	実践研究福井ラウンドテーブル 2022 spring sessions(第 42 回)参加者総数 660 名程度
2022.6.18-19	実践研究福井ラウンドテーブル 2022 summer sessions(第 43 回)参加者総数 640 名程度 8.4 宮古島ラウンドテーブル 11.26 東京ラウンドテーブル
2023.2.18-19	実践研究福井ラウンドテーブル 2023 spring sessions(第 44 回)参加者総数 660 名程度
2023.6.17-18	実践研究福井ラウンドテーブル 2023 summer sessions(第 45 回)参加者総数 560 名程度 8.25 岐阜ラウンドテーブル、10.28 信州ラウンドテーブル 2023(信州大学教育学部附属長野三校研究会) 11.18 東京サテライト・ラウンドテーブル 2023 11.18-19 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.23 奈良ラウンドテーブル 2024.1.27 岐阜ラウンドテーブル

福井大学連合教職大学院が実践する教育改革グローバル・コミュニティへの誘い ラウンドテーブルの広がりと深まりを通して

福井大学連合教職大学院教授 木村優

新しいミレニアムが幕をあけたばかりの 2001 年 3 月、教師教育にかかわる 20 名程の実践者・研究者が福井に一堂に会し、互いの教育実践研究を交流し合う研究会が催されました。この研究会のテーマは「教師の実践的力量形成をめざして」でした。このテーマのもとで解き放たれた熱い議論が、現在、福井大学連合教職大学院が毎年 2 月と 6 月に開催している実践研究福井ラウンドテーブルを生み出しました。

あれから十数年間、福井大学連合教職大学院は福井県内外と国内外の学校や教育機関との交流・往還を積み重ねてきました。そして、21 世紀の教育の実現に向けた学校と教師の挑戦を支援すべく、実践研究福井ラウンドテーブルを大黒柱にして実践コミュニティ¹を耕し続けてきました。

実践研究福井ラウンドテーブルでは会を重ねるごとに、参加者の実践報告が多様な色彩を帯びています。ラウンドテーブルの創成期には数人の教師たちによる実践報告に限られていました。しかし現在では、教師の教育実践の報告や学校改革の挑戦過程から、教育研究者による学校との協働研究、医療・福祉における省察の実践への挑戦、学生・院生の大学(院)におけるプロジェクト学習の展開、地域の人々による学校・家庭の教育支援、海外学校での新し

い教育実践への挑戦、そして、小中高生による自らの学びの軌跡についての報告に至るまで、多彩な実践が毎回のラウンドテーブルで交流されているのです。

この間、教育研究の飛躍的な前進を足がかりとしながら、「教育の質保証」と「学びの転換」を目指したさまざまな施策が矢継ぎ早に打たれるようになりました。アクティブ・ラーニング、チームとしての学校、コンピテンシー・ベース、カリキュラム・マネジメント、主体的・対話的で深い学び等々といった新しい改革用語が流布するように、学校と教師、そして子どもたちには実に多くの変化が求められています。これらの求めは、超スマート時代(Society5.0)、超 AI 時代、VUCA² ワールド等と呼ばれる新しい時代における、あらゆる個人とすべての社会の幸福を実現するための、私たち人類の挑戦の現れと言えるでしょう。

このような変化の激しい時代の教育改革期では、学校、教師、子どもたちの豊かな学びと確かな育ちをサポートする機構が必要になります。学校も教師も子どもも、それぞれが孤立するのではなく、つながり合い、支え合い、協働することで変化に向けた挑戦が可能になるのです。そこで、福井大学連合教職大学院は現在、21 世紀のあらゆる実践者、研究者、そして

子どもたちの挑戦を支え促すための省察的機構³としての実践コミュニティとして成熟を遂げようとしています。

省察的機構としての実践コミュニティは、そのコミュニティに参加するメンバーの、文字通り「実践の省察」を支え促すことを最重要のビジョンとして描きます。このビジョンを基盤とした実践研究福井ラウンドテーブルでは、そこに参加する日本全国・世界各地の実践者や研究者は当然、それぞれ福井大学連合教職大学院とは異なるコミュニティ、あるいは複数コミュニティに属していて、それぞれのコミュニティの中で変化を生み出す新たな実践に挑戦しています。つまり、実践研究福井ラウンドテーブルは、イノバティブ(革新的)なローカル・コミュニティが集まる大きなコミュニティの「坩堝(るつぽ)」なのです。

もしも、このコミュニティの中で数多くあるローカル・コミュニティがイノバティブな実践をベースにして結びつき、そこでコミュニティ間のネットワークが広がり、協働が加速すると、いったい何が起きるのでしょうか。それはおそらく、誰も見たことのない新しい知の創造であり、新しいかかわりの現れです。この新しい「知」や「かかわり」のダイナミクスが大きくなるほど、広がるほど、現代社会を取り巻く困難や未来社会に予測される問題を突破するいくつかの「ソリューション(解)」が生み出される可能性が高まります。ただし、「知」と「かかわり」のダイナミクスを大きくし、それらのイノベーションの質と価値を深めるためには、「戦略」が必要になります。ただ指を咥えて待っているだけでは、ダイナミクスやイノベーションは起こらないのです。

福井大学連合教職大学院では、これまでの実践研究福井ラウンドテーブルの展開で結びつきを強めたいくつかのコミュニティと連携して、分散型コミュニティのデザインに着手し始めました。もしも、複数のローカル・コミュニティが共通の理念やビジョンのもとで、「実践し省察するコミュニティ」に昇華することができれば、そして、そこで互いの課題や問題を見つけ出し、それらの解決策を考え出して共有可能な「知」を蓄積することができれば、それぞれのコミュニティが分断することなく連動して各地の「挑戦」を支え合い励まし合うことが可能になると考えたためです。

すなわち、日本全国・世界各地にあるローカル・コミュニティを結びつけて、各コミュニティの相互作用による変化を生み出すために、複数の境界をまたいでメンバーが学び合うことができる分散型のコミュニティ構造をデザインしていくのです。福井大学連合教職大学院の分散型コミュニティへの挑戦とはつまり、現代社会と未来社会に生きるすべての人々の学びと育ちを支える、教育改革のグローバル・コミュニティを築く戦略なのです。

2014年度から、福井大学連合教職大学院との連携協働に基づき、長崎、大阪、静岡、東京、宇都宮、福島でラウンドテーブルが開かれるようになりました。その後、ラウンドテーブルは奈良や長野でも産声をあげ、各地の学校の校内研修にも広がっていきます。2017年度には福井大学連合教職大学院とJICAとの連携を基盤として、アフリカのマラウイでラウンドテーブルが始まりました。日本各地そして世界のラウンドテーブルで引き出されはじめた教師たちの教育への熱誠、子どもたちの学びへの希望、そしてすべての人々の幸福への追求が、新たな省察的機構としての実践コミュニティを各地に創発していくことになることでしょう。

福井大学連合教職大学院ではこれまでも現在も、私たちのコミュニティ、そして分散型のグローバル・コミュニティに参加くださるあなた(ピア)を求めています。ぜひ、私たちとのかかわりを通して、そして実践研究福井ラウンドテーブルを通して、21世紀を革新する教育のあり方についてともに考え、すべての人々が幸福を追求できる未来社会をともに築いていく、この挑戦に多様多層に同行いただけると幸いに思います。

¹ あるテーマについての関心や熱意等を共有して、それぞれが所属する分野・領域の知識や技能を相互に持続的に交流し、深めていく集団や組織のこと(ウェンガー・マクダーモット・スナイダー, 2002)。

² 現代社会の特徴を表す4つの言葉: Volatility(不安定)、Uncertainty(不確実)、Complexity(複雑)、Ambiguity(曖昧)の頭文字をとった造語。

³ コミュニティの組織学習を支え、コミュニティのメンバーの実践の省察を励ます組織=機構のこと(ショーン, 2017)。

Archive

—アーカイブ—

実践研究福井ラウンドテーブル 2020 Spring Sessions と、ラウンドテーブル 2022 Summer Sessions に参加していただいた方の報告を、Newsletter No. 132(20.04.25)と No. 159(22.06.10)からご紹介いたします。なお、執筆者の所属は執筆当時のものです。

Newsletter No.132(20.04.25)より

ラウンドテーブルでの感想

福井市議会事務局 西澤公太

今回、ご縁あって、福井ラウンドテーブルにシンポジストとして参加させていただきました。今回はコミュニティゾーンで、「福井市国見地区での地域担当職員の関わりについて」というテーマで発表をさせていただき、非常に貴重な経験をさせていただいたと思っております。

例年であれば、コミュニティゾーンでは、福井市内各地区の公民館職員さんをご自分の地区の事例を紹介するのが定番であったという風に聞いております。ところが、今回は市役所の職員が発表する。ましてや自分の住んでいない地区について発表するというところはこれまであまり無かった事例かもしれません。

ここで、簡単に福井市の「地域担当職員制度」について、ご紹介いたします。

この制度は市職員が住民主体の地域づくり活動に参画するなど、地域との関わりを積極的に進め、地域の様々な課題への対応や、協働のまちづくりの更なる推進を図ることを目的に、平成 28 年 5 月に開始しました。地域担当職員の仕事は、地域課題やニーズの把握、課題解決に向けた方策の検討、地域づくり事業の拡大・発展の支援などです。そのための活動として、地区の会議への参加や、地区行事（イベントなど）の企画や運営のサポートなどを行っています。

地域担当職員の配置基準は原則として、30～40 歳の市職員が各地区（公民館区域）2 人に配置されます。地区内または近隣地区在住が基本ですが、私のように近隣地区ではない地区の担当となる場合もあります。

今回は、国見地区内のまちづくりの担い手の世代交代と、居場所・役割をどのように作り出すかの 2 点について、他のシンポジストの方々とお話させていただきました。

まず、国見地区内の世代交代をいかに作り出すかについてです。どうしても「世代交代」というと、バトンを「渡す」人と「受ける」人の 2 つに分けて考えがちではないかと思います。この考えですと、バトンを受けた人は重い責任を背負って、地域を引っ張っていくような印象を受けてしまいますし、そのようなバトンは誰も受け取らないのが本心かと思います。なので、世代交代という考えから一度脱却し、地域に関わるためのきっかけとコンテンツ（地域に関わりたくなる地域の自主的な催しなど）をいかに作り出すかが今後の地域運営において重要になってくるのではないかと考えています。

国見地区の皆様と地域担当職員が協力して行っている取り組みの 1 つに「地域づくりミーティング」という取り組みがあります。これは、地区の活性化を担う各代表者と地域担当職員が地区課題等について話し合うものであり、地域と地域担当職員を繋ぐ機会の 1 つでもあります。

国見地区においては、この場所が世代を超えて将来の自分たちのまちの在り方を考える場所になりつつあり、今後の展開が非常に楽しみです。

最後に、国見地区には様々な方がいて、皆さん様々な背景を抱えています。地域の人々それぞれが、互いの価値観や暮らしを理解し、認め合うことが地域づくりを進める第 1 歩である気がします。

「ラウンドテーブル」に参加して

福井市和田公民館館長 北島喜一

今回は、図らずもシンポジストという大役を仰せつかり、大変緊張の中での発表でしたが、何とか七～八十％は思いを伝える事が出来たかなと思っています。

ラウンドテーブルへの参加は初めての事でしたが、素晴らしい体験をさせて頂き大変光栄に思い、感謝いたしております。

今回、“持続可能な、コミュニティをコーディネートする”をサブテーマとして“地域のこれからを拓く担い手をいかに育てるか”

という題目のもとに、長年の地域における様々な取り組みについて紹介させて頂きました。事業を継承していくことも大切ですが、地域が活性化するためには新たな事業を発掘すると共に、地域の方の多様で多層なコミュニティの学びをコーディネートすることが重要だと思います。その為には避けて通れない世代継承の問題やこれからを拓く担い手など、様々な問題点がありますが、日頃の小さな親切の種まきが大事で、その種が小さな芽を出し、その芽を大切に育て、花をつけ実がなるまで、お互いの心と心の繋がりを持つことで、自然と解決していく問題だと思います。

もう一人のシンポジストである福井市国見地区地域担当職員の西澤公太氏のお話では、西澤氏は木田地区の方でありながら国見地区を担当し、地域おこしを第三者としてサポートしているとお聞きし、人

口も少なくお年寄りも多い中で、過疎化にならないような取り組みを後押しする大切な仕事をされている事に頭が下がる思いであり感動しました。

また、フォーラムでは、福井大学生大友香奈さんから、新しい事へのチャレンジとして、学生達が企画・運営する「探求ネットワーク」活動に興味を持ち、様々な考えを持った面白いひらめきのメンバー達と共に、子供たちのやる気！と繋がること、協力を促すこと、思いやりの心を育てることを視点として、子供たちと楽しく交流したという発表がありました。また、同じ大学一年生の前嶋一澄さんからは、「仕事する中で基礎となること」をテーマとし、その中で「繋がること」と「経験」の二つに着目して聞き取り調査をした様子などのお話をお聞きしました。二人の将来の目標が教員とのことで、コーディネート役の永岩先生からお二人に対し、教員経験者の立場からの色々なアドバイスや、働き方改革の問題で教員の仕事も大変だが、くじける事なく目標に向かって頑張っているとの励ましがあり、私も心から応援したくなりました。

和田地区には、“和田発展不己”（わだはつてんやまず）という合言葉があります。私は、この言葉を胸に積極的に地区民と一体となり、地域がますます活性化するように、未来を拓く次世代の若者と手と手をつなぐ公民館を目指していきたいと思っています。

Reflections on Roundtables for Communities of Practice and Reflections, featuring teacher practices of Myanmar, Japan and Philippines

ミャンマー、日本、フィリピンの教師実践をテーマにした
ラウンドテーブルでのコミュニティの実践と省察を振り返って

Research Student, University of Fukui, Michael Wilson I. Rosero

福井大学教員研修留学生 マイケル・ウィルソン・I・ロセロ

(今回、ニュースレターでの再掲載にあたって、機械翻訳を追加しています。そちらもご一読下さい)

I participated Spring Roundtable 2020 on February 15-16, 2020 held at the University of Fukui. On the first

day, I presented my poster about the Philippine's teacher performance appraisal system called the

Results-based Performance Management System (RPMS) in the knowledge fair. The presentation was in the Japanese language as it served as one of my final requirements of my class. On the second day, I participated in one of the roundtable cross sessions composed of educators from Myanmar, Japan, and Egypt. During the roundtable, each of us presented our own practices, experiences and reflections on what we have learned from the discussions.

From Naing-先生's presentation, I learned that in Fuzoku, teachers take part in research meetings in which they talk about their teaching practices throughout the whole year. Such discussions are focused on the student learning and achievement, which contribute to curriculum and school management. Teachers learn together with their colleagues through establishing professional learning communities (PLCs). These PLCs are crucial for lesson study, a model for professional development that is popular in Japan. I've been interested in how lesson study works in a school and Naing-先生's presentation gave me an overview of what to expect once I start my internship. I was not trained formally as a teacher but I am excited to collaborate with teachers and learners, especially in terms of their professional development.

Another meaningful discussion was that of Kazuya Numata-先生. Numata-先生 teaches science and technology in a private junior school in Kyoto. What

makes his teaching style interesting is that he doesn't follow a particular plan or curriculum and he teaches one unit for the entire term. But he makes his activities so authentic and real life-oriented for students to learn enthusiastically. Students learn how build bridge models, experience real bridges and develop a deeper understanding of thought and philosophy of infrastructure and human relations. Numata-先生 also visited the Philippines several times and conducted teacher trainings for Filipino teachers.

I presented to the group the RPMS, the teacher performance assessment system of the Philippines. I gave the context of the Philippine education and the recent implementation of a professional standards for teachers, which became the framework for the professional development of teachers and other human resource systems related to teaching profession such as recruitment and hiring, teacher induction, rewards and recognition, among others. Being able to participate in the roundtable discussions gave me an opportunity to share the recent initiatives on teacher quality and professional development in the Philippines to other educators from different countries. The questions they raised also allowed me to consider different perspectives on how to approach my research study regarding the role of school leaders in teacher professional development.

私は、2020年2月15日～16日に福井大学で開催された春のラウンドテーブル2020に参加しました。初日は、フィリピンのRPMS(Results-based Performance Management System)と呼ばれる教員業績評価制度についてポスター発表しました。この発表は、私の授業の最終課題の一つであったため、日本語で行いました。2日目には、ミャンマー、日本、エジプトの教育関係者で構成されたラウンドテーブル・クロスセッションに参加しました。そこでは、各自が自分の実践、経験、そして議論から学んだことについての考察を発表しました。

ナイン先生の発表から、福井大附属では教師が研究会に参加し、年間を通して教育実践について話し合っていることを知りました。また、その話し合いでは、生徒の学習や達成度に焦点を当てており、その結果カリキュラムや学校運営にも貢献しているとのことです。教師たちは、プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティ(PLC)を組織することで、同僚とともに学んでいます。このようなPLCは、日本で普及している専門能力開発のモデルである授業研究にとって極めて重要であるといえます。

私は学校での授業研究がどのように行われるのかに興味があり、ナイン先生のプレゼンテーションは、インターンシップを開始した後に期待されることの概要を教えてくださいました。私自身は教師としての正式な訓練を受けていませんが、特に専門的な能力開発という点で、教師や学習者と協力することを楽しみにしています。

もうひとつ有意義だったのは、沼田和也先生のディスカッションです。沼田先生は京都の私立中学校で科学技術を教えています。彼の授業スタイルが興味深いのは、特定の計画やカリキュラムに囚われず、1 学期を通して 1 つの単元を教えることです。彼の授業は、生徒たちが熱心に学べるように、実生活に即した本格的なものになっていて、生徒たちは橋の模型の作り方を学び、実際の橋を体験することで、インフラと人間関係についての思想や哲学を深く理解しています。沼田先生も何度かフィリピンを訪れ、フィリピンの教師たちのために教師研修を行っているそうです。

私はフィリピンの教員業績評価システムである RPMS について、グループの皆さんに紹介しました。フィリピンの教育の背景や、最近導入された教員の専門的能力開発の枠組みとなる教員の専門職基準、その他、募集・採用、教員導入、報奨・表彰など、教職に関連する人事制度について説明しました。座談会に参加できたことで、フィリピンにおける教師の質と専門能力開発に関する最近の取り組みについて、さまざまな国の教育関係者と共有する機会を得ることができました。また、彼らから出された質問によって、教師の専門能力開発におけるスクールリーダーの役割について、私の調査研究にどのようにアプローチすべきか、異なる視点から考えることができました。

Newsletter No.159(22.06.10)より

子どもと共に歩める私でありたい

信州大学教育学部附属松本中学校 鎌倉 琢磨

Zone A では「学校：21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う～多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校・園の在り方を探る～」というテーマのもと、軽井沢風越学園や福井県立武生高等学校の実践が発表された。両者の発表に通底していた考えは、「探究的な学びを行っていくために、学習の主体者である子どもをどう捉え、どう向き合い、どのように学びを支えていくか」といった点であった。私は、両者の実践を聞き、教師の在り様を問い直さざるを得ないと感じた。なぜなら、お二人が日々の子どもの営みを見つめ直すとともに、教師自身が「本当にこれでいいのか」と、教育の意味や教師の役割を問い直し、変容し続けている姿がまじまじと伝わってきたからだ。私は、「目の前にいる子どもたちと真剣に向き合っているのか」「子どもの姿を捉えたつもりでいただけではないのか」といった、強い焦燥感に襲われ、自分の教育観を揺さぶられるような思いがした。実践発表をお聞きし、自分の教育観を見つめ直す指針として、特に私は、以下の 3 点について示唆をいただいたと思っている。

① 子どものよさや強みを全職員で肯定的に捉え、指導に活かす

子どもはそもそも多様であり、子どもがもっているよさや強みが違う。感じ方も違う。だからこそ、内

在するよさや強みが、さらに伸びていくような支援をしていく必要がある。そのためには、子どもを肯定的に捉え、真摯に向き合うとともに、多くの職員の目で子どものよさや強みを語り合いながら、自分自身の教育観を日々、更新していくことが必要である。

② 期待や予感を抱く教材との出会い

教材が「自分の生活や生き方とどうつながるか」「その教材について学んでいくことで自分の生活や世界がどう変わっていくのか」といった、今後の学習への期待や予感を抱ける教材との出会いが重要であることを改めて実感した。その期待や予感が切実な「思いや願い、問い」につながり、探究的な学びを行っていく際のエネルギーになるのではないかな。

③ 教師自身が一人の探究者として、生徒と並び見しながら歩みを進める

教師が定めた目標に全員が到達するようにと、教師が導いたものに、子どもは探究的に学ぶ喜びを感じることにはできない。生徒と共に、並び見しながら教材の本質や価値を共に分かち合っていくことで、「探究的な学び」が生まれてくる。教師自身も「一人の探究者」として、生徒と共に歩みを進めていく。その先に分かち合いたい場面、情景が生まれ、それが「探究的な学び」になっていくのではないかな。

その後のブレイクアウトルームでは校種や県を越えて、多くの先生方と、シンポジウムの発表について議論を重ねた。そこで驚かされたのは、話をしている「心地がいい」「ワクワクする」ということだ。「『探究』とは何か」「生徒に内在するよさや強さとは何か」について、同じように悩み、実践されている仲間がい

ることに安心感や心強さを抱いたからだ。同時に、明日からの実践を行っていく活力もいただいた。先生方と語り合い、見えてきたことをもとに、子どもと向き合いながら実践を重ね、再びラウンドテーブルで語り合いたい。

ラウンドテーブルに参加して

北海道旭川市地域子育て支援センター ぱれっと 岡本 千晴

前職の同僚に誘われたことをきっかけに、ラウンドテーブルは、2回目の参加となります。今回も学び多いラウンドテーブルでした。貴重な時間をありがとうございました。福井県には残念ながら行ったことがなく、ラウンドテーブルに参加をさせていただく事で、福井ってどんなところだろう？と、福井県を調べ、行った気分で参加をさせていただきました。

私の参加した「Zone C」は、教育関係の方、学生の方、公民館関係の方など、色々な分野の方が集まっている事とても新鮮です。私事ですが、現在、地域子育て支援センターで勤務をしており、その他、地域活動として、「子ども食堂」という子どもの居場所づくりを行っています。併せて、旭川市内と近郊の子ども食堂や学習支援、プレーパークといった、子どもの居場所づくりをしている人達とのネットワーク（横の繋がり）の構築と、子どもの居場所に「行ってみたい」「応援したい」「作りたい」という方々を繋ぐ、子どもの居場所を持続するための中間支援的役割の活動も行っています。なので、Zone Cの持続可能なコミュニティというテーマはとても興味深く、自身の仕事と地域活動と重ねて話を伺っていました。

これからの若者と、仕事や地域活動で、繋がる事を課題と感じているので、峯森先生の「学校を地域に開くということ」を伺いながら、旭川では、どうやって「高校生」と繋がり巻き込むかを考えていました。また、松平先生の「里山起業論」は、旭川とリンクする事が多く、私が、旭川でできることは何なのか？価値

ってなんだろう？と、真剣に考える時間となりました。

お二人の話を伺った後、そして、小グループの先生方とお話をした後に、何事にも全力で取り組んで、楽しんで生きる大人でありたいとワクワクするものが、内側から湧き上がってきました。旭川の若者達が、「地域とつながりたい」「自分もこんな大人になってみたい」と思えるような「かつこいい」（かつこつけという意味ではありません）大人になろう！私自身が一步を踏み出す勇気を頂いたように思います。

「ラウンドテーブル」は、自分には持っていない皆さんのアイディアに触れる事ができ、仕事にも、地域活動にも活かせるヒントが沢山つまって、視野がグッと広がる良さがあると思います。そして、色々な方の話を拝聴することで、自分では気付いていない新たな視点を持つ事ができるところも良い点だと感じています。毎回、終わる頃には、熱量が高くなり、興奮さめやらぬ状態になりますが、終了後、富永先生が、参加者の皆さんとの時間を大事にして下さる事で、クールダウンし、温かい気持ちへと変化していきます。

今回のテーマである「つどい、つながり、新しい価値をつむぐ」を、北の大地旭川で、多くの人と繋がり、集うことで、旭川の新しい価値を見つけ、紡いで行きたいと思っています。次回のラウンドテーブルを楽しみにしています。

「出会い」 zone C

福井県立福井商業高等学校 1年 半田 智咲

「福井大学主催のラウンドテーブルに参加していませんか？」福井市中央公民館の河合先生に紹介していただき、興味が湧き参加させてもらうことになった。経験豊富な大人たちに囲まれて初めて参加したラウンドテーブルは貴重な経験となった。

Zone Cに参加させてもらった。福井県立丸岡高等学校の峯森先生と一般社団法人こしのくに里山再生の会の松平さんのご講演を聴いた。峯森先生の講演で印象に残っている言葉がある。「Nothing is unrelated to life」(人生に関係のないものなどない)という言葉だ。私達が生活し活動を行う中で多くの物事が密接に関係しているのだと感じた。また、地域協働部のお話では、生徒の自主性を大切に高校生が自ら考え実行する地域まちづくり活動をされていると知った。私は学生まちづくり班に所属し駅前活性化に向け活動している(＝ストリートパーク建設に向けた地域まちづくり活動)。峯森先生のご講演内容から地域協働部の活動が素晴らしいと感動し、同世代の活動にとっても興味が湧いた。そして今度、ご連絡が来次第、活動見学をさせてもらえることになった。

松平さんの講演では挑戦することの大切さを学んだ。林業のお仕事を本格的に殿下地区でされるまでの体験されてきた内容のお話は驚きと感動でいっぱいだった。自分の「好き」を大切にし、実行される行動力・挑戦する力に圧倒された。挑戦することに必要な初めの一步＝大きな勇気こそが自分に対して成長・経験・知識などを与えてくれるのだと考えた。私

自身も規模は大きくないが学生まちづくり班の活動を通して実際に感じたことだ。松平さんのお話にあった「福亥軒」の猪ラーメン・鹿ラーメンを来年こそは食べに行ってみたいと思う。

林業のお仕事を本格的に殿下地区でされるまでの体験されてきた内容のお話は驚きと感動でいっぱいだった。自分の「好き」を大切にし、実行される行動力・挑戦する力に圧倒された。挑戦することに必要な初めの一步＝大きな勇気こそが自分に対して成長・経験・知識などを与えてくれるのだと考えた。私自身も規模は大きくないが学生まちづくり班の活動を通して実際に感じたことだ。松平さんのお話にあった「福亥軒」の猪ラーメン・鹿ラーメンを来年こそは食べに行ってみたいと思う。

グループセッションでは経験豊富な大人の方々と意見交流をした。自分の意見を伝えることの難しさを感じたが、色んな方の考え・価値観を共有し新たな知識・考え方を知ることができた濃厚な時間であった。日頃お話できない方と話すことで物事を考える視野が広がる良い機会になった。

ラウンドテーブルは多くの方々と出会える居場所だと考える。出会いが昨日の私より今日の私を成長させる。私は今回多くのことを学びこれからも多くの方と出会い成長していきたい。だからこそ来年度6月のラウンドテーブルにぜひ参加したい。そして新たな出会いに感謝し明日の私の人生を歩んでいく。

参加すると 何かが起こるよ ラウンドテーブル

福井市森田中学校教諭 木下 慶之

2年ぶりに福井RTに参加することができました。2年前はかろうじてコロナ禍が始まる前で、福井大学会場にて同僚たちと一緒に参加し、いろんな方々と交流することができましたが、以後はオンラインが苦手な私は参加を躊躇していました。しかし、RTに

参加すると、何かしら新しい気づきや出会いがあり、次なる実践への萌(きざし)が芽生えるものです。

今回は意を決して、この2年間に共に歩んだ同僚や子どもたちとの実践記録を携え、2日間の全日程に参加することに挑みました。

1 日目は Zone E「探究」に参加。当初は、本校の各学年の子どもたちや同僚も一緒に参加しようと企画していたのですが、参加直前にコロナウイルス感染症対応という慌ただしい波にのまれ、断念してしまいました。

学校のみなを RT に誘うって難しいですよ。その流れをつくったり、士気を高めたりするのがなかなかできない。勇気が出せない私はみなを誘うのに直前まで怖気付いてしまい（ポスターは配ったものの）、参加申し込みができずにうじうじしていました。

そんな中、子どもたち（福井高専に進学が決定した3名）が、「先生、参加しましょう！」と、弱気な学年主任の私を励ましてくれました。木村優先生は超直前申し込みにも関わらず快く、かつ丁寧にご対応ご配慮くださいました。ありがとうございました。そしてごめんなさい。

さて、子どもたちとは発表についてあまり打ち合わせはできず、当日を迎えてしまいました。さらに、私は別のグループのファシリテーターを務めることになり、彼らの発表を結局見ることはできませんでした。翌日、「無茶振り参加させてしまい申し訳なか

った」と伝えに教室へ行くと、彼らはストーブの周りで「RT でこんな学校があったんだ」「森田推し隊紹介してきたよ」と仲間たちに実践報告をしているのでした。「先生！お疲れ様！私たちががんばりましたよ」「もっとうまく話したかったな」「先生の姿もモニターで見えていましたよ」「貴重な経験になりました」と、温かく感想を報告してくれました。報告を聞いていた他の生徒からは「なんで僕も誘ってくれなかったのですか！」「僕も坂井高校へ行ったら、誘ってください」との声も。他校と交流したり、実践を発信したりすることについて、彼らは予想以上に興味や関心をもっていることに気付かされました（億劫になってしまっているのは実は私たち大人の方なのか）。

彼らとは、この2年間コロナ禍ではありましたが、一緒にいろいろプロジェクトを経験し、子どもも教師も、学びと成長を実感することができました。詳細は省察的实践研究会論文集第2号に寄稿しましたので、ご覧いただけましたら幸いです。子どもたちの活動誌は森田公民館や森田中学校で入手できます。

（WEB 上でも公開

<https://sites.google.com/view/moritaoshitai>）

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。

ご自身の実践や近況、提言や意見を投稿してみませんか。

修了生や関係機関の方の投稿も大歓迎です。

関心がある方は、編集担当(dpdtfukui_n1@yahoo.co.jp) までご連絡ください。

教職大学院 Newsletter

No.179

2024. 2.17 発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp